謹賀新年

No. 129 2018. 1

（株）よかネット

NETWORK

習志野市の公共施設マネジメントの取組み …… 2
小郡駅周辺地区の活性化を考えるワーキング会議がはじまります！
～メンバー随時募集中～ …… 4
漁師と会える直売所「うみてらす豊前」の誕生物語 …… 5
第 128 回地域ゼミ報告　日南市油津商店街再生の舞台裏 …… 8

見・聞・食

日本焼酎学会　薩摩伊佐焼酎を訪ねて …… 12

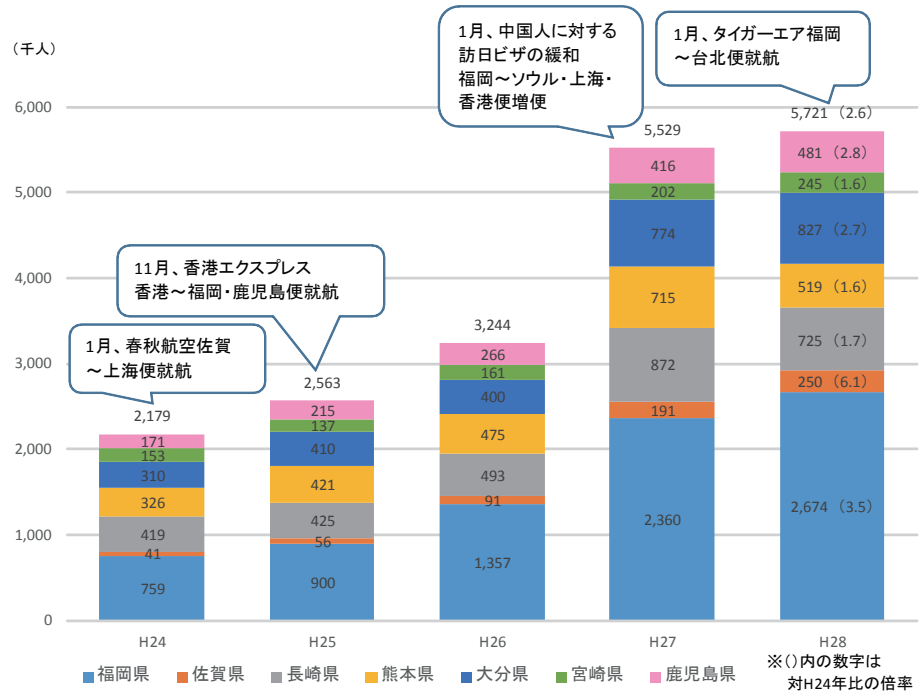
近況

10 数年ぶりに大相撲を見に行く …… 16
社会支出の方向 …… 17
今年も九州各地の観光・物産振興に関わっていきたい
と思います …… 18
新年の抱負 …… 19
博多古民家で飲む日本酒の会 …… 19
私事ながら… …… 20
航空オタ 5 年目に突入 …… 21

●今年も九州インバウンド市場の成長に期待

H29 年 6 月 7 日発表の宿泊旅行統計調査によると、九州における H28 年の外国人宿泊者数は 5, 721 千人と、前年を 192 千人上回った。直近 5 年の九州各県別の外国人宿泊者数の推移を見ると、新興国の経済成長、LCC 路線の拡充、ビザの緩和、円安等の影響で、H24 年から H28 年までに 2. 6 倍に増加した。県別で見ると、福岡県は H24 年比で 3. 5 倍に増加しており、H28 年の九州における外国人宿泊者数の 46. 7%を占める。また、佐賀県は H24 年の宿泊者数が 41 千人であったのが H28 年は 250 千人と 6. 1 倍に増加した。一方で、長崎、熊本、宮崎は 1 . 6 ～ 1. 7 倍の成長となっている。特に、熊本県は H28 年の宿泊者数が 519 千人と、熊本地震の影響で前年から 196 千人減少した。しかしながら、H28 年 6 月に熊本～台湾便が再開、H29 年 11 月 16 日より香港エクスプレスによる定期チャーター便就航（週二回）が再開、ティーウェイ航空の熊本～仁川便が H29 年 4 月 28 日より新規就航（週四回）するなど、地震の風評被害から着実に回復している。今年も九州のインバウンド市場のさらなる成長に期待したい。

外国人宿泊者数の推移



習志野市の公共施設マネジメントの取組み

山田　龍雄

弊社では一昨年に飯塚市の「公共施設等総合管理計画」、昨年度は引き続き、その実施計画を総務省の外郭団体である「一般財団法人地域総合整備財団（ふるさと財団）」から調査研究の採択を受け、お手伝いをしました。

「公共施設等総合管理計画」は、平成 28 年度までに作成することで、計画策定や公共施設の除却費について地方債の特例措置が付加されたこともあり、多くの自治体で策定されています。しかしながら、その実施計画や個別計画については、各自治体とも必要性は理解していても、住民への合意形成や首長の意向等もあって、策定している自治体は少なく、これからの課題となっていると思われます。

今年度、総務省では個別計画策定を促進していくため、下記のような地方債の有利な条件を付けていますが、個別計画の詳細な内容は示されておらず、各自治体とも指導を求めている状況と思われます。

このような状況を踏まえ、個別計画を実施していくための要点及び総務省が求めている個別計画の内容についての情報を得るため、個別計画を先行して策定している自治体を取材してきました。

公共施設等の適正管理の推進

〇地方財政措置
１．対象事業
①施設の集約化・複合化事業
②長寿化事業
③他の用途への転用事業
④立地適正化事業
・コンパクトシティの形成に向けた長期的なまちづくりの視点に基づく事業
⑤市町村役場機能緊急保全事業
・昭和 56 年の新耐震基準導入前に建設され、耐震化が未実施の本庁舎の建替事業
⑥除却事業
２．地方債の充当率
①充当率 90%、交付税措置 50%
②③④充当率 90%、交付税措置 30%
⑤充当率 90%（交付税措置対象分 75%）、交付税措置 30%
⑥充当率 90%
・現行の 75%からの引き上げ
３．事業年度
・平成 29 ～ 33 年度までの 5 年間
※⑤については平成 32 年度まで（4 年間）

● 10 数年前から先行的に取り組んできた習志野市

習志野市で話をお伺いした吉川清志主幹（政策経営部資産管理室資産管理課）は、「ふるさと財団」の調査研究における審査委員の一人であり、最後の報告会後の懇親会で意見交換をさせていただき、今回取材をお願いしたものです。

吉川氏に公共施設マネジメントの取組みをお伺いすると、ご自身の経歴を交え、取組みの経緯を話していただきました。

「私は、天体観測が趣味であり、習志野市がプラネタリウムを建設する際に職員採用があったことから応募し、昭和 55 年に採用された。採用後は、希望通りにプラネタリウムの建設、運営に携わった。その後、パソコン等が導入される際に、吉川はどうも数字やパソコンに強いようだと評価され、平成 3 年度に教育委員会企画管理課に異動となり、財務会計の運用等に携わった。その後、平成 8 年度に市長直属で設置された行政改革本部に異動となり、翌年財政課に配属された。財政課に配属され、市の財政状況をみると、非常に厳しい状況であり、将来大変なことになると思った。特に、公共施設の維持管理費が、大きな財政負担になることが想定された。財政課には 11 年間在籍したが、その間に、市長の支援を得ながら公共施設のマネジメントに取組むことになった。」

意外にも吉川さんの市役所への就職談義から始まったヒアリングでしたが、その後、習志野市の公共施設マネジメントの取組みの要点について、話していただきました。

習志野市の取組みについては、視察資料である「公共施設再生への取組（平成 29 年度版）」から抜粋して、紹介させていただきます。

●計画策定と併せて内部の体制改革

習志野市の人口は、増加していたのにもかかわらず、いち早く公共施設マネジメントに取り組んできた背景には、当時の市長の行政改革、特に後世にツケを回してはいけないという強い思いがあったと言われています。

公共施設マネジメントに関して本格的に取組みはじめた、平成 17 年度以降からの経緯をまとめたのが下表です。

内部体制の強化としては平成 20 年度に、財政課内に所属していた行革担当を独立させ、同じ財政部内に経営改革推進室を設置しました。

この部屋は愛称「エンジンルーム」と呼ばれ、自治体経営の調査・研究、行政改革や集中改革プランの進行管理、事業仕分け、老朽化した庁舎の建設手法の調査研究、新公会計制度の対応など、行革に関わる全庁的な課題に取組んでいます。発足当時は吉川室長を含め 3 人体制で、大変だったようです。

また、平成 24 年度には資産管理体制の強化を図るため、財政部に「資産管理室」を設置します。この資産管理室には、公有資産の有効活用や企画立案を行う「資産管理課」と公共施設の建設と保全を一元的に担う「施設再生課」が置かれ、効率的な業務推進と専門技術の育成強化を図る体制を構築しています。

●市民合意形成への取組み

公共施設の個別計画を実施に移行していく際に、さらに重要なのが住民への周知と理解です。

習志野市は、この点に関しても丁寧な対応を行っています。平成 21 年 3 月には「公共施設マネジメント白書」を公表し、その後、白書を活用し、市の公共施設の実態、今後の更新費等について、市民カレッジ、出前講座などを通じて、多くの市民に丁寧に周知しています。

習志野市では、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大地震によって市庁舎が大きな被害を受け、緊急に市庁舎建設の実現に取組む必要に迫られたことや、老朽化した学校等への被害がありました。そこで、この機会に市内 16 地区の「まちづくり会議」において市庁舎の現況と今後の老朽化対策の取組みについて説明を行うとともに、公共施設再生に向けたシンポジウムを開催するなど、公共施設の再生、マネジメントの必要性を唱えてきました。

習志野市の公共施設マネジメントの取組みのあゆみ

	計画策定 その他(周知活動等)	内部体制改革	外部委員会
H8	・行政改革に取組む		
H17	・第3次行政改革大綱に施設白書の作成と改善策を位置づける		
H19	・公共施設白書策定		・施設白書作成委員会の立ち上げ
H20		・経営改革推進室の設置 （エンジンルーム）	
H21～H22	・公共施設マネジメント白書の公表		・習志野市公共施設再生計画検討専門協議会の設置
H23	・東日本大震災で本庁舎が被害を受ける ・16地区のまちづくり会議へ庁舎本館の現状と今後の方針を説明		
H24	・公共施設再生計画 基本方針の作成	・資産管理室の設置 （資産管理課・施設再生課）	
H25	・公共施設再生計画策定 ・公共施設等再生整備基金の創設		・地域再生・活性化委員会の設置
H26	・公共施設再生基本条例制定		・公共施設再生推進審議会の設置

資料公共施設再生への取組（平成 29 年度版）を再編

吉川氏曰く「公共施設再生計画を策定する過程の平成 25 年度には、住民との意見交換会や説明会を年間 70 回ほど実施した。」とのこと。

さらに平成 26 年 6 月議会において、公共施設の問題は単に行政のみが取組むものではなく、行政、市民、事業者が一緒になって再生に取組むべきものであることを明確にするため、「公共施設再生基本条例」を制定されています。

●個別計画への実施～大久保地区公共施設再生事業

吉川氏は「公共施設マネジメントは単に公共施設を削減することが目的ではなく、社会経済状況の変化に対応しつつ、施設の再編再配置を実行し維持管理コストを軽減していくことで、できる限り機能を維持しながら持続可能なまちづくりを実行していくことが大切である。」とおっしゃっていました。

現在、習志野市は、この機能維持の再生計画を大久保地区というところで実施しています。

この事業は、公共施設再生計画の第 1 期計画期間事業であり、モデル事業として位置づけられています。京成大久保駅から周囲 1km 圏内に分散配置されていた 8 施設（屋敷公民館、生涯学習地区センターゆうゆう館、藤崎図書館、あづまこども館、大久保公民館・市民会館、勤労会館、大久保図書館）を、全市民を対象とした生涯学習の拠点施設として格上げし、駅前の中央公園周辺に位置する、3 つの建物［大久保図書館（図書機能）、大久保公民館･市民会館（生涯学習・ホール機能）、勤労会館（生涯学習・スポーツ・児童館機能）］に統合するという計画です。公園と施設との一体的な運営も視野に入れ、PFI 事業方式で実施しており、完成は 32 年度となっています。

大久保地区再生計画のイメージ

吉川氏は、10 数年前から公共施設の再生に関して着実に一歩ずつ、実施へと進めており、人口ピーク時に再生の第 1 期の完成をみるというスケジュールにこぎつけています。習志野市の取組みの経緯をみると、計画から何か形あるもの、形として見えるものとなるためには 10 年近くの歳月を要しています。

習志野市の人口ビジョンによると、平成 31 年度に約 17 万 4 千人でピークとなり、その後、減少に転じると推計されています。

既に合併して同一機能の施設が多数あると予想される市町村こそ、負担を先送りせず、より良い資産を次世代に引き継いでいくために、早い時期に個別計画の策定、実施へ取組んでいく必要があるのではないかと思います。

（やまだ　たつお）

小郡駅周辺地区の活性化を考えるワーキング会議がはじまります！
～メンバー随時募集中～

山﨑　裕行

弊社では、昨年度に小郡市から委託を受けて小郡市内の商業活性化の方針及び施策を示す「小郡市商業活性化計画」策定のお手伝いをしました。この計画の中で、特に重点的に取り組む施策の 1 つとして「同業種・異業種等との交流機会の創出」を掲げており、ワーキング会議はこれを具体化した取り組みとなります。このワーキング会議で目指すことなどについて、ご紹介します。

●商業活性化を考える上での課題

商業活性化計画を策定する中で、統計データの整理や市民、事業者アンケートを行いました。統計データからは、買い物客が市外に流出していることや、年間販売額が類似・近隣都市と比べて少ないこと、市民アンケートからは、市内で買い物する人が少ないことや、ターゲット別の商品情報の発信が十分ではないこと、事業者

アンケートからは、後継者が未定のところが多いことや、新規事業の立ち上げや多店舗展開を考えているところがあること等が分かりました。

この中でも、一番衝撃的だったのが、小郡市の中心性指数（ある市の小売業がその市の属する県の顧客をどれだけ吸収しているかを示す指標。1以上なら市外の消費者が市内に買い物に来ている。1以下なら市内の消費者が市外に買い物に出ている）の低さです。近隣市町が概ね1～0.7という値の中で、小郡市は0.45と福岡県内でも低い値でした。近隣に大型商業施設が多く立地していることが主な要因と考えられますが、逆を言えば、大型商業施設にとってかわる店舗が市内に少ない（知られていない）とも言えます。それを踏まえて、取り組むべき課題を以下のように整理しました。

・新規出店の促進
・独自性の創出
・後継者・従業員対策
・個店の強化・魅力向上
・地域貢献意識の醸成
・買い物弱者対策
・情報発信の充実
・商業拠点の再整備
・市外流出への対策

これらの課題をどのように解決していくか。行政だけで解決できるものではありません。事業者や住民、商工会などの各種団体、それぞれが出来ることから取り組んでいくことが重要です。そこで、活用出来る資源は何か、それを使って何が出来そうか、お互いに連携することでより効率的、効果的なことはないかなどを検討する場として、ワーキング会議を開催することになりました。

●ワーキング会議の狙い～一緒に考えませんか～

今回のワーキング会議では、市の中心市街地である西鉄小郡駅周辺地区（西鉄小郡駅から概ね半径500mの範囲）の活性化策（人、モノ、知恵、情報、そしてお金を呼び込むための方策）を話し合うこととしています。

そして、会議で議論した様々な活性化策については、実行につなげていきたいと考えています。会議は、今年度から来年度にかけて全12回の予定で開催します。第1回目は、既に平成29年12月10日（日）に開催したところですが、今後、概ね1ヶ月1回ペースで開催していくことにしています。

会議には、有限会社日智の代表取締役である佐藤皓祠さんを講師としてお招きします。佐藤さんは、北九州市黒崎地区中心市街地活性化協議会タウンマネージャーとして6年間、活性化に向けたコンセプトづくりや人材育成、事業スキームの検討などに携わられてきました。また、九州各地で個店・商店街の再生・活性化に携わられています。

小郡市が好きで、西鉄小郡駅周辺地区の活性化に関心・チャレンジしたい事業者及び一般の方であれば、どなたでも参加可能です。毎回の参加が難しくても構いません。参加を希望される方は、下記までご連絡をお願いします。

（やまさき　ひろゆき）

【お問い合わせ先】
小郡市商業活性化協議会
（事務局：小郡市商工企業立地課）
電　話：0942-72-2111（内線142）
F A X：0942-72-5050
E-mail:shoko@city.ogori.lg.jp

漁師と会える直売所「うみてらす豊前」の誕生物語

本田　正明

宇島港のすぐそばにある「うみてらす豊前」。H28年6月にオープンし、まだ2年も経っていない水産物を中心とした直売所です。2階には食堂が併設されており、周防灘を眺めながら、魚料理を食べることができます。1階の直売所は、いけすが真ん中にあり、漁師が生きたままの魚を放り込んで去っていく姿に衝撃を受けました。横では漁師の奥さんがお客の質問に答えながら、目の前で魚を捌いてくれます。漁師の顔が見える豊築漁協が運営する公設民営の施設です。どうやってこの施設が生まれたかとても気になったので、施設の構想から施設の立ち上

直売所の真ん中に配置された生け簀。漁師が直接魚を補充します

対面販売ブースでは漁師の奥さんがしゃべりながら魚を捌いてくれます

げまで関わられたはまげんの石谷さん（よかネットNO. 114 関連記事あり）に話を聞きにいってきました。

問：そもそも石谷さんはどうしてうみてらす豊前に関わるようになったんですか？

H 19 年に転勤で宇島にある豊前海研究所に赴任してきたのがきっかけです。今はコンサルタント会社を経営していますが、当時は福岡県の水産海洋技術センターの職員でした。豊前海はカニが多く取れるのですが、安値で取引されていて、佐賀の竹崎に流れている現状をみて、漁協で直売してみませんかと提案してまわっていました。

問：地元が売りたいという意識だったんでしょうか。

漁協に提案したら、「あんたが売ってくれ」と、全く興味がないという状況でした。転機となったのは、H 20 年 2 月の新北九州空港開港イベントです。東京の早稲田のリーガロイヤルホテルで 700 人の参加者に蒸した豊前本ガニを提供したのですが、足りなくなるくらいの大人気でした。この様子をみた漁協の組合長の目の色が変わり、同じ年の 11 月には漁協で買い取ってカニの直売をはじめることになりました。

問：私も当時買いに行ったことがあります。倉庫で販売していましたよね？ほんとにここでいいのかなと不安になったことを覚えています。

販売も漁協の事務職員たちがやっていて、はじめはなんで「私たちがしないといけんの？」という雰囲気でした。今では、職員がカニを持っただけで仕分けられるくらいです。

問：あの方たちは漁協の事務員さんだったんですね。なんでもされますね。食堂もそうなんですか？

カニの直売を始めたほぼ同時期（H21 年 2 月）に、高校の合併で余った温室を移築してかき小屋（冬季のみ）を始め、4 月からは「うのしま豊築丸」として営業をはじめました。

食堂を提案したのは組合長ですが、漁協を定年退職する女性職員が代表になり、漁師の奥さんたちと始めました。

当初は、周りの工場の人たちをターゲットに 500 円の日替わり定食を出していたんですが、取れる魚は頻繁には変わりません。焼く・煮る・天ぷらだけでは、日替わりといえず、すぐ飽きられました。500 円では原価が安くてまともに魚も使えません。もともと温室の建物には、クーラーもなくて蒸し風呂状態といった問題もありました。お客も年々減っていき、H24 年には夏場だけでも閉めた方がいいのではと相談されました。

問：当時どんなアドバイスをされたんですか？

地元は来なくてもいいから北九州をターゲットに定食を 1,000 円にしようといいました。そのかわり、魚をふんだんに使おうと。日替わりを季節替わりにして、カニ、カキ、イカ、コショウダイ、ハモ、サワラをメインに御膳をつくり、年 6 回リピートしてもらおうと。豊前海にあるものを売ることに切り替えていきました。

問：高く売ることに抵抗はなかったんですか？

すごくありましたよ。地元の人が高いといったり、その値段で売れるのか心配するんです。なので、少しずつ値上げしました。500円の定食を残したまま新しい800円のメニューを考えます。ある程度したら、今度は1,000円のメニューを考えて、500円のメニューは外していくという感じです。実際に、高い方から売れていくのをスタッフも見ているので、安いメニューをはずすのは問題なかったと思います。そうして一般向けの定食を変えて、ターゲットの客層を絞っていきました。

問：料理とかは誰が考えられたんですか？

鍋のだしの味付けや天ぷらの提供の仕方などは、食品加工アドバイザーの尾崎正利さんや料理人の友人に協力してもらいました。量や見た目などは、お盆に料理を並べて、みんなで「野菜を一品足そうか」「夏場は豆腐がいいんじゃない」と話しながら決めました。そのようなことを繰り返しながら、内容を豪華にしつつ、現在は1,500円から2,000円の値段になっています。

問：うみてらす豊前の話はどこから出てきたのでしょう？

H25年に豊前市長になった後藤さんがフィッシャーマンズ・ワーフをつくることを公約に掲げて当選しました。その実現に向けて直売所と加工所と食堂を併設した施設をつくりたいという相談を受けたのがきっかけです。施設コンセプトなどを基本構想から関わらせてもらいました。ちょうど、コンサルタントとして独立したときで、実績もまったくない中、よく任せていただいたと思います。

問：直売所のイメージというのは最初からあったのですか？

他の事例などもみていて、漁師の奥さんたちの対面販売をしたいというのはありましたね。そもそも私は食堂より直売所をやりたかったんです。食堂でイカを100杯分使ったとしても、トロ箱でいうと10箱ぐらいです。漁師の取扱量としては少なくて面倒な量なんです。食堂はあくまで客寄せで、魚を直売することをメインにしたいと思っていました。実際、温室で食堂をしていたころも、昼市といって倉庫前で魚を売っていました。でも、お腹が満たされた人たちはなかなか魚を買いません。食べる人と買う人は違うんだと気づかされました。今でこそ、うみてらす豊前では食堂で食べた人が気に入って魚も買ってくれるようになりましたが、直売所だけ、食堂だけを目的としたお客さんは今でも多いです。

温室で食堂をしていたころの魚の直売の様子。無理せず、できることからやるという取り組みの蓄積が現在に活かされています

問：直売所ではどんな苦労がありましたか？

漁師の対面販売をしていますが、漁師も忙しいのでお客が来ないと帰ってしまいます。対面販売の手数料は8%（他は15%）と低く設定して、漁師がいることがここの魅力だから来て欲しいというのですが、なかなか伝わりません。ただ、漁師の中にも理解して毎朝コンスタントに来てくれる人がいて、協力して呼びかけてくれています。

また、前身の食堂「うのしま豊築丸」が繁盛しだした頃、特定の漁師だけから食堂が仕入をするのはおかしいという声が出てきました。民間だったら取引相手は自由なのですが、漁協が運営しているので漁師全体が潤うことが求められます。私が間に入って、仕入れ対象の魚種の漁師が全員関われるようにしたら、今度は最初の漁師から私のせいで自分への仕入注文が減ったといわれました。もっとお客を呼んで、もっと儲からせるからといってなんとか納得してもらいました。この全体が潤うようにという点は、うみてらす豊前が出来た後も苦労する点です。

豊築丸（食堂）の季節替わりメニュー。2ヶ月ごとに旬の海鮮が食べられます

問:石谷さんをみていると、漁師や直売所の方々との距離がとても近いように感じます。

独立した当初から3年間、週4～5日は通っていました。当時のうのしま豊築丸は人手不足で、それを補うためにパートと同じ時給でレジ打ちや皿洗いもしていました。アドバイザーに専念することになった今でこそ、来るのは週1日ぐらいですが、当時は頻繁に来ていました。笑い話ですが、いつもうのしま豊築丸にいたので、漁協に転職したと勘違いした元同僚もいるくらいです。そのおかげで、お客の状況もわかりますし、漁師やスタッフの意見も聞けます。そうしないと状況は見えてこなかったと思います。

問：これからのうみてらす豊前について一言お願いします。

1年目の売上は直売所9千万円、食堂5千万円強で合せて1.4億円くらいです。当初の目標からすると少ない状況です。これからは経営面に力を入れていく必要を感じています。漁協の直営で運営しているのですが、漁師の組織なので経営や責任などが曖昧な部分があります。役員や職員が一緒に経営の数字をみることなどから始めています。

以上が、石谷さんに伺った話です。前半は県の職員として関わり、後半はコンサルタントとして継続的に関わられています。行政職員出身なのに優れたマーケティング感覚や経営感覚を持たれていることもさることながら、漁協の職員のごとくスタッフと話されている様子をみて、こうしたコミュニケーションこそが地域づくりには欠かせないものだと思いました。うみてらす豊前での取り組みがコンサルティングのノウハウの蓄積にもなっているようです。直売所そのものの話よりも事業コーディネートの話が中心となっていましましたが、これからの地域づくりコンサルタントの見本だと感じました。（ほんだ　まさあき）

第128回地域ゼミ報告

日南市油津商店街再生の舞台裏

本田　正明

第128回の地域ゼミは「日南市油津商店街再生の舞台裏」というタイトルで九州大学持続可能な社会のための決断科学センター准教授の高尾先生にお話をしてもらいました。実は高尾先生は、九州大学景観研究室の仲間です。由布市の景観計画などでも一緒に仕事をさせていただきました。お互いに景観分野のみならず、様々な地域づくりのマネージャーや裏方として活動をしています。

宮崎県日南市の油津商店街再生の取り組みはテナントサポートミックスマネージャー（以下、サポマネ）の木藤さんが市長を超える月額90万円などで話題になり、その後実際に29もの店舗を誘致し、奇跡のまちづくりと報道もされたのでご存知の方も多いかもしれません。地域づくりの裏方に関わる人間としては、あの成果にたどり着くまでの裏方の苦労が気になります。地元の協力者もいなければ簡単に進まないからです。別プロジェクトの企画に高尾先生をお誘いした際、日南市中心市街地活性化事業（以下、中活事業）のチーフディレクターとして関わられていたことを知り、ぜひ表には出てこない中活事業の舞台裏を話してほしいと今回のゼミをお願いしました。以下、高尾先生のお話です。

●スタートは2大組織の対立の緩和から

まちづくりはチームプレーなので1人ではできません。私には私の舞台裏があり、市の職員にも、市民にも、サポマネの木藤さんにも、そ

れぞれ舞台裏があります。それが油津のまちづくりの良かった点です。それだけみんな必死だったし一生懸命でした。私の話は油津のプロジェクトの全体像ではありませんが、まちづくりがどのように進んだのか、私からみた舞台裏をお話したいと思います。

日南市には内陸に城下町飫肥があり、車で10分ぐらい離れた港に油津があります。飫肥杉を油津港から搬出するための港町として発展したのが油津でした。飫肥と油津は仲がよくなくて、役所はその中間にある吾田（あがた）におかれました。現在では、人口は吾田が一番多くなっています。

私は東大土木出身なのですが、恩師の篠原先生が油津のデザイン会議（のちにデザイン部会に縮小）のメンバーでした。ある日、中活事業のコーディネートをしてほしいと電話があり、二つ返事で受けたのが関わるきっかけです。以前務めていた会社で油津に関わったこともあり、元気のない商店街のイメージを持っていました。大変な仕事を受けてしまったというのが第一印象でした。

当時、油津商店街はデザイン会議（いわゆるよそ者）と中心市街地活性化協議会（地元有力者）という2つの組織があり、複合ビルの開発を巡って対立している状況でした。どちら側にも入っていない人をコーディネーターとして真ん中に据えようと、日南市の発案で九州工業大学（当時宮崎大学）の吉武先生と私が呼ばれたようです。

デザイン会議と中心市街地活性化協議会は、どちらも油津をよくしたいという思いは一緒ですが方法論が違います。お互いがほとんど話をしていないのが現状で、批判が間接的に伝わるのが問題だと感じました。両者がテーブルについた70人あまりの油津まちづくり会議（以下、まち会議）を設置して、最初に「油津基本方針5か条」というものを提案し、“長い目でみて地域のためになることをしよう”という総論の確認を行いました。会議や飲み会を1年間続けることで、深く理解しあうほどではありませんが、誤解と対立は大分解けたと思います。

●まちづくりの下ごしらえで60人にヒアリング

1年目は、他に地域のヒアリングをしました。まち会議のメンバーは年配の方が多かったので、「若くて元気な人はいませんか」と呼びかけると役所の人はみんな「いませんねぇ」という反応です。今、木藤さんの周りにいる人をみるとこんなにいるんだという感じですが、当時は見えていない状況でした。油津に限らず、日南市内で面白い人がいれば話を聞きましょうと60人余りにヒアリングをしました。日南市に行くときは毎回2泊3日でヒアリングと飲み会の繰り返し。最初は役所からの紹介で聞きに行って、数珠つなぎに花屋やカフェなど、面白いといわれる人に話を聞きに行きました。その中か

油津まちづくり会議の基本方針5か条

一．油津地区は、日南市の「中心市街地」としての役割を担っており、本会議で検討される事項は、油津地区の地域社会、地域経済の向上を目的とすると同時に、日南市全体の地域社会、地域経済の向上に貢献するものでなければならない。

二．本会議で検討される事項は、他地域の物まねではなく、「日南市オリジナル」の豊かな暮らしの創造を目指すものでなければならない。その際、本会議で目指す「豊かさ」については、経済的なものに加えて、精神的なもの、文化的なものなども含めた総体的なものとして考えることを基本とする。

三．本会議では、今後、中心市街地である油津地区と市内外の各地域がどのように連携していけるのか、その中で、油津地区においてどのような施策・活動を展開することが効果的であるのかについて、検討を行なうものとする。

四．本会議では、日南市における次世代の暮らしを常に意識し、10年後、20年後、50年後の日南市の地域社会と地域経済に貢献することを基本方針としながら、今年、来年、再来年と言った現在から近未来に具体的に何ができるのかについて検討することとする。

五．本会議を軸とした油津地区におけるまちづくりの取り組みは、今後、日南市の他地域におけるモデル的な存在となることを意識して、官民協働におけるまちづくりの推進方策について、常に評価、検証を行ないながら検討を進めることとする。

ら 20 人ぐらいをピックアップして交流会などを行いました。その参加者から木藤さんの応援団が 10 人ぐらい生まれています。まちづくりの下ごしらえをしていたような状況でした。

60 人余りにヒアリングをしている間、「なぜ油津が中心市街地なのか」ということを全員に言われました。飫肥は元気だし、吾田も人口が集まっている、油津は衰退しているのに、なぜそこに力を入れるのかわからないということでした。

中活事業の採択を受けるには、中心市街地としての基盤ストックがあること、そこが良くなることによって周りも良くなる中心性があること、衰退していて危機的状況にあること、という 3 つの要件を満たす必要があります。そのため、飫肥も吾田も油津も中心市街地だけど、中活事業の要件を満たすのは油津なんです、ということをシンポジウムなどを通じて丁寧に説明しました。ただ、市民には不平不満が溜まっていたようで、中活事業 1 年目の途中で中活事業の中止・廃止を公約として掲げた崎田市長が当選しました。

油津のまちづくり年表
(日南市中心市街地活性化事業報告書より一部抜粋)

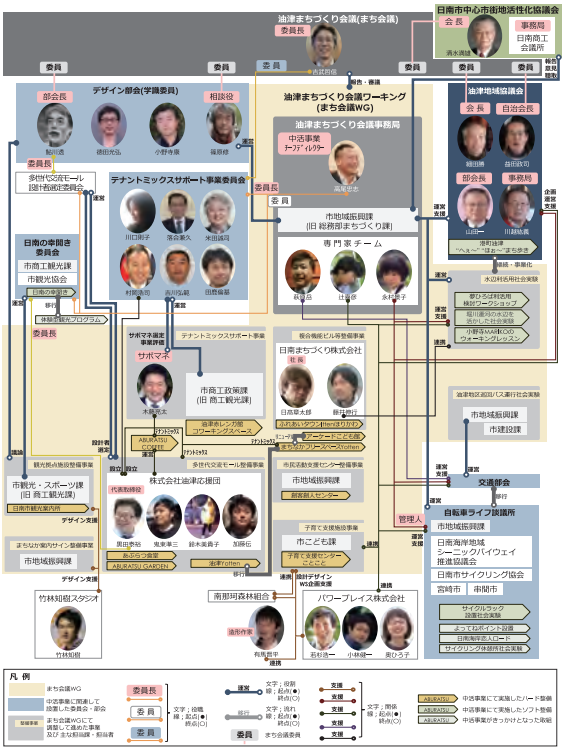
年度	出来事
2012 年度	事務局協議で「油津まちづくり会議基本方針五箇条」提示（6月） 油津まちづくり会議ワーキング設置（6月） 油津まちづくり会議設置（8月） 日南市庁内まちづくり懇談会（年度内5回） 内閣府　日南市中心市街地活性化基本計画認定（11月）
2013 年度	テナントミックスサポートマネージャー（4月公募） 事業委員会設置（5月） 木藤氏選定（6月） まちなかフリースペースYottenオープン（8月） 株式会社油津応援団設立（3月） 油津地区都市デザイン会議を油津まちづくり会議と統合（3月）
2014 年度	ABURATSU COFFEEオープン（4月） デザイン部会設置（5月） 第1回中心市街地活性化事業シンポジウムを開催（11月） 油津赤レンガ館2F　コワーキングスペースオープン（11月） 二代目湯浅豆腐店オープン（2月）
2015 年度	油津軒下イロドリ市（4月） 土曜夜市復活（7月） 油津Yotten、あぶらつ食堂オープン（11月） ABURATSU　GARDENオープン
2016 年度	日南市観光案内所開設（12月） 市民活動支援センター（創客創人センター）開設（1月） 油津まちづくり会議閉幕（3月）
2017 年度	複合ビル「ふれあいタウンIttenほりかわ」オープン（4月） 子育て支援施設「ことこと」オープン

●油津まちづくり行動計画（案）づくり

もうひとつ、「油津まちづくり行動計画（案）」というものを提案しました。これは常に更新し続けるという意味で（案）をとらず、事業期間の 5 年間ずっと更新し続けたものです。油津の中活事業は全部で 50 事業ほどありますが、事業は各課から挙げてもらったものが多く、内閣府に計画の認定を受ける過程で担当者が変わるなどして、事業の位置づけや関係性などがよくわからないものが多く見られました。中活事業自体はあまり変えられないので、スケジュール別や場所別に並べてみて、5 年間の事業として整合性が取れているのかということをまち会議の下のワーキングで議論し、ロードマップの再編などを行いました。

ワーキングは中活事業のマネジメントを行う心臓部だったと思っていますが、5 年間で 30 回行いました。事業担当課が入れ替わりで事業進捗を説明し、課題などを整理します。1 回あた

日南市中活事業の体制図（最終）



りの会議が5時間近くに及ぶ長丁場の会議でした。ワーキングで整理したものを上部のまち会議に諮るのですが、まち会議自体は情報共有と割り切っていたので、実質的にはワーキングで調整を取り仕切っていました。

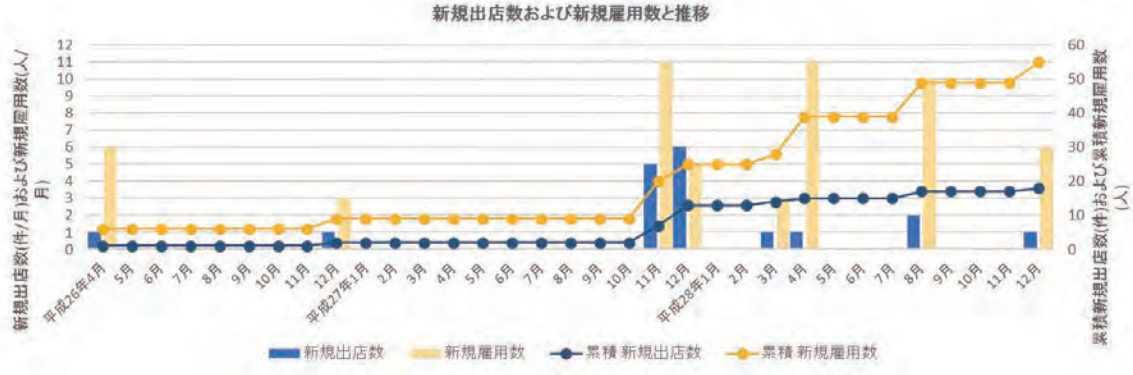
●まちづくりの持続性を期待されて木藤さんが選ばれる

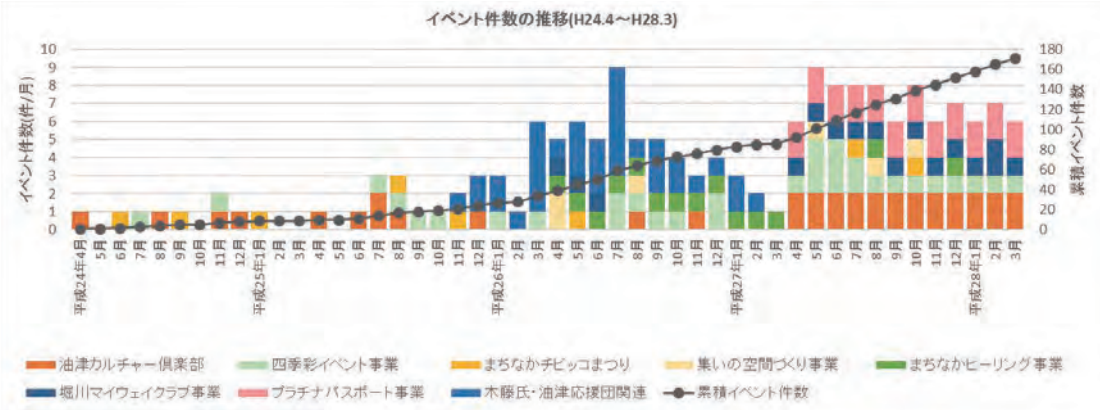
中活事業の中には、柱になる事業と枝の事業があって、木藤さんが関わったテナントミックスサポート事業は3本柱の1つともいえる重要な事業でした。当初、担当係長がワーキングに説明に来た際は、テナントミックスの計画をコンサルタントに委託してつくるという話でした。それを個人に発注した方がいいという提案を私が延々繰り返したこともあり、結果的に個人に発注することになりました。月額90万円というのは、もともとコンサルタントへの委託料を単純に12ヶ月で割ったものだったのですが、メディアに取り上げられたこともあり、全国だけでなく世界中から333人の応募がありました。

商業に詳しい人なども入ったテナントミックス事業委員会を立ち上げて、そこで5時間半かけた会議で10人に絞り込みました。このプロセスの過程で、事業委員会のメンバーが、まちづくりの持続性を考えて、商業やテナント誘致の専門家ではなく、コミュニティデザインのできる人を呼ぼうという意識の共有ができたことが大きかったと思います。

その後、商店街の空き店舗を活用した公開プレゼンテーション（1次審査）や2次審査を経て選ばれたのが木藤さんでした。その後は、木藤さんが地元の方々と一緒にまちづくりを進めていった取り組みがほとんどです。ワーキングはほとんど関わっていません。ただ、事業委員会は、テナントミックス事業が終わるまで継続することになっていて、毎年木藤さんの成果を採点していました。最初の2年間は空き店舗に1件しか誘致できなかったので、周囲からは非難の声が強かったのですが、「採点するのは自分たちだから心配するな」と応援する事業委員会でもありました。

油津商店街の店舗誘致及びイベント数の推移





※出典はすべて「日南市中心市街地活性化事業報告書」

最後に、中活事業の評価は定住人口や通行量などが評価軸になっていますが、まちづくりの評価としては最終的な結果しか評価されません。「まちづくりはプロセスだ」という気持ちもあって、中活事業のプロセスそのものを評価したいと思いました。5年目は中活事業を通じてまちづくり事業を企画する側の人がどれだけ増えたのか、といった人づくりの部分も評価したいと思い、国の評価だけでなく、評価軸自体を自分たちで考えようと、これまで中活事業に関わった人たちに記事を書いてもらった評価報告書をつくっています。こちらはネットにもあるので、閲覧してもらえればと思います。

●中活事業で得た財産を活かしたまちづくり

以上が高尾先生のお話でした。その後に参加者との意見交換を行ったのですが、そこでは地元の覚悟とまちづくりの持続性についての話題になりました。油津の中活事業は少なくない額の補助金を使っていて批判もあった事業なので、市の担当者も覚悟とエネルギーが必要だったようです。高尾先生の話の中にもなんども職員の名前が出てきましたが、関係する組織運営だけでも相当大変です。市民への説明などでは職員が矢面に立つ場面も少なくなかったそうです。

市長の交代や中活事業の終了を経て、油津ではこれまで外部から関わっていた人たちはほとんどいなくなってしまいました。油津全体のコーディネートをしたり、まちづくりを引っ張っていく人は民間にも行政にも少なくなっているそうです。中活事業後の話を聞くと落差を感じて悲観的になってしまいますが、誘致した店舗やまちづくり会社の油津応援団は活動を続けています。

もともとまちづくりがなかったところに、まちづくりの新しいプレーヤーたちが集まり、母体ができたことは得難い成果だと思います。外部の人も頻繁には来れなくなったかもしれませんが、ネットワークでつながっているし、応援もしてくれるはずです。今回の中活事業で得た財産を活かして、新たなプレーヤーたちがこれからどのように油津のまちを盛り上げていくのか、私はむしろこれからのまちづくりに期待したいと思っています。

（ほんだ　まさあき）

日本焼酎学会

薩摩伊佐焼酎を訪ねて

山田　龍雄

日本焼酎学会とは、焼酎をこよなく愛する豊田謙二先生（元福岡県立大学人間社会学部教授、現在：熊本学園大学教授）が福岡県田川市で焼酎好きな仲間を募り、焼酎文化の研究及び普及を目的に、2000年に発足した会である。

日本焼酎学会は、①2～3ヶ月ごとに会員お薦めの焼酎などを持ち寄り、品評会、②年1回の焼酎蔵巡り（2011年から実施）、③豊田先生による焼酎に関する本の出版（薩摩焼酎紀行、南のくにの薩摩文化、その他焼酎に関する論文多数等）④シンポジウムの開催（2005年に田川市にて開催）などを行い、焼酎に関する研究と焼酎文化の普及に努めている。

私は、2004年に豊田先生から推薦をいただき、この会に入会し、早や13年を経過した。

その間、豊田先生には弊社の地域ゼミや私が加盟している異業種交流会などで、焼酎の歴史や文化について、ご講演もしていただいた。話を聞くたびに先生の焼酎に関する造詣の深さと知識欲には感心させられるばかりである。

2011年から始まった「焼酎蔵巡り」は、私も毎年参加させてもらい、会員として記録係を担当させてもらっている。

今年は仕事と重なってしまい、参加することができなかったが、豊田先生から「いつもよかネットに掲載させてもらっている。今回も印刷ものとして記録を残したいので、是非、今年の蔵巡りの記事もよかネットに掲載して欲しい」とのお願いがあり、豊田先生の記録を掲載させていただいた。

●薩摩伊佐焼酎の研修を終えて（豊田謙二氏）

9月末、まだ残暑の残る薩摩路、この地区は鹿児島の市内からは「北薩」と呼ばれ、「伊佐米」の産地として名を成している。また、この地は

郡山八幡神社

焼酎の文字を初めて記した木片の落書

知る人ぞ知る「焼酎」という文字が初めて歴史上、最初に使われた土地としても、歴史家のなかでは著名である。

(「焼酎」の文字についての話)

「焼酎」という文字の希有な歴史証言者となるのが、同地、大口市に建立された郡山八幡神社である。国指定重要文化財に指定されたのが、昭和 25 年 11 月 20 日である。歴史的発見はその 4 年後の昭和 29 年の改築時である。2 枚の板を釘づけした木片に書かれていた「落書」である。以下の文章である。

『その時、座主ハ大キナこすてをちやリて一度も焼酎ヲ不被下候、何ともめいわく事哉
永禄二歳八月十一日　　作次郎、鷺田助太郎』

この永禄 2 年は西暦 1559 年、この年に神社は補修され、上記の「落書」が書かれたと推定されている。現代語に訳すとこうなる。

『座主は大変なケチだから、まったく焼酎を振る舞ってはくれない。何とも、困ったことだ』

片牧静江『郡山八幡神社』(平成 24 年) では、大工棟梁の助太郎と弟子の作次郎をこの「落書」の作者と推定する。八幡神社の修復なのだから技能を要する宮大工であったと想像したい。彼らには宮大工の誇りもあり、真夏の炎天下での造作に困憊、しかも座主は焼酎を保管している、こうした情景のなかで「神木」を「落書」で汚したのである。

「焼酎」の文字を本邦で初めて記したのは、漢字を嗜む教養人たる宮大工であることは誠に興味深い。大きな時代の転換に伴う動乱の気配がすでに漂い始めていた。国内では、桶狭間の戦いで織田信長が銃で勝利し (1560 年)、公家の文化を継承する室町幕府が滅び (1573 年) る。世界的には、ルターの 95 ケ条 (1517 年)、カルヴァンの宗教改革 (1941 年)、こうした新教たるプロテスタント教に抗した旧教のカトリック教のなかに 1534 年に「イエズス会」が結成され、1549 年にはその宣教師ザビエルがすでに薩摩に上陸していたのである。

(11 社の協業化した代表銘柄～伊佐錦)

伊佐地方は鹿児島県北部に位置している。近世の伊佐は、鹿児島からの主要街道は「加治木」ー「横川」―「大口」という、いわゆる「大口筋」の終点にあたる。この地は深い盆地の底にあり、夏は酷暑、冬は零下もあるという気候に、湧水は軟水という風土に恵まれ、水稲はこの最適な条件を活かし「伊佐米」と呼ばれている。

さて、この恵まれた風土のなかに「大口酒造第二蒸溜所」が座っている。社名を正確に言えば大口酒造株式会社であり、1970 (昭和 45) 年に伊佐地区での当時の焼酎蔵元 11 社が完全協業化し大口酒造協業組合として立ち上げた会社である。平成 19 年に株式会社へ変更している。協業化には個々の蔵元の醸造は維持しながら瓶詰め段階でブレンドして、統一銘柄で販売、という協業化もある。伊佐地区では、11 社が自己の銘柄を返上して一つの株式会社を設立した

協業化した焼酎銘柄11社	
緒方酒造「伊佐乃白玉」	八反丸酒造「太洋」
川原酒造「さつまのなだ」	田中酒造「米乃露」
有満醸造「伊佐乃露玉」	淵之上酒造「恵比須」
向原酒造「白菊乃露」	神渡酒造「伊佐自慢」
むさし醸造「むさし」	山田酒造「忠元櫻」
竹内酒造「櫻」	

大口酒造株式会社。ステンレスの貯蔵タンクが整然とならんでいる第二蒸溜所

甲斐商店蔵の風景

が、その思い切りに感服する。その焼酎銘柄が「伊佐錦」である。その後約50年を経過しながら、その焼酎評価は一貫して高水準で安定していると言えよう。

ここで、その高い評価を生み出す秘密の扉を開いてみたい。

事前に、工場見学と質疑応答のお願いをしていたが、製造部部長の原田幸太郎氏が我々の到着時間に合わせて、すでに待機していただいたのである。当方は日本焼酎学会会員の6名、その一人は東京から駆けつけていた。

①まず、焼酎の品質への強い意識が、焼酎製造過程の全般に貫かれている。2004年9月に、伊佐盆地にモダンな「第二蒸溜所」を建設し、ここで貯蔵による「熟成」過程までを担当して、本社でのビン詰と出荷に繋いでいる。原材料のサツマイモは、1965年代に開発された「コガネセンガン」の南薩摩産を使用し、イモ臭を消すために念入りな作業を課している。丁寧に洗浄、イモの両ヘタ・キズ・痛みの個所を完全に切除している。

②伊佐地区の大自然の恩恵を製造に活かしつつ、さらに、その自然環境保護のために永続的な活動が組み込まれている。つまり、伊佐盆地は清流、寒冷な気候などの天然の風土に恵まれているが、大口酒造はその自然の立地を品質の向上に活用するとともに、その自然の風土を保全する活動にも貢献している。その一例を挙げると、焼酎「ガラス瓶」はビンで回収して、洗浄による再利用によってリユース循環を進めている。また、蒸溜による「カス」は特産の豚の飼料として、また堆肥としても活用され「循環型」環境保全に貢献しているわけである。

③伝統的な「造り」の継承とともに新たな焼酎ファンの開拓に挑戦を続けることである。生産量は年間に25度焼酎で約400万本である。この安定した販売量が生産量の安定を確かにしているのであるが、代表銘柄「黒伊佐錦」は「クロイサ」と愛称されて、白麹菌の焼酎全盛期に黒麹菌での焼酎の販売戦略が功を奏して、評価が定着したのである。現在では、「白伊佐錦」「甕伊佐錦」、あるいは女性・若者をターゲットとする「伊佐小町」などの製品開発が続けられている。

焼酎醸造技術に関しては、総務部部長の神渡巧氏の説明を伺ったが、その言葉を遮って「25年程前に杜氏の神渡さんに説明をうけましたが」という私の問いに、即座に「父です」と答えられた。ご尊父は前垂れを掛け、職人風のいかにも「杜氏」の体躯を思いだすのであるが、眼前の神渡氏はいかにも技術者の態、改めて名刺を拝見して「総務部部長・研究室長」の肩書に納得した次第である。

（代表銘柄「伊佐美」の合資会社　甲斐商店）

この焼酎蔵に30年程前にお尋ねしたことがあるのだが、相乗りした車の方向がどうも私の記憶とは異なる。運転する本会の事務局長は、「ナビに従っています」の返事。過去にこの地を訪ねた時、地図をみながら、人に尋ねながらの道中であったのだが、随分便利になったものである。「目的地に着きました」というが、も

大山酒造の蔵の風景

手動による種かけ作業

とより私の記憶にある風景とはまるで異なる。記憶の底に残る微かな印象を糸口に、商店主に質問をしようと決める。

にこやかに、さっぱりした出で立ちで我々を迎えて下さったのは、開業後 4 代目の代表社員甲斐弘一氏であった。奥さんが我々一人ひとりのために、わざわざテーブルに菓子とアイスを用意していただき、誠に感謝・感激の態であった。さて質問は、この地に甲斐商店が転居された理由を尋ねることから始まる。

甲斐商店は当時の大口市中心街に位置していたのだが、この山あいに移転したのは大口市の「土地区画整理事業」のためであるという。この「事業」の対象になると、建物はもとより総てが解体の対象となる。伝統的な焼酎造りの基である「大甕」も使えない。新しい 4 石大甕は徳島県鳴門市大谷焼への特注の購入となった。もう一つ、厄介な問題が生じた。

地下水が出ないのである。さらに地下 180 メートルのボーリングを余儀なくさせられたのであった。移住してきた「蔵付き菌」が期待通りの働きをしてくれない。これでは「伊佐美」の伝統的なコクとカオリの個性がでない。

イモ、コメ、ムギなどを主原料とするいわゆる本格焼酎づくりは、工場の姿をとってはいても、機械による生産ではない。麹菌に酵母などの働きに依存している。つまり、本格焼酎は穀物などを主原料に、微生物が造る産物であり、焼酎杜氏などの技能者はその造りのサポーターなのである。

さて、甲斐氏は工場の転居にあたっては、蔵に住む「蔵付き菌」も移すために、解体する旧蔵の板塀などを慎重に新居に移築したとのこと。ところが、蔵での焼酎造り再開後に「伊佐美」の焼酎ができないのである。地下水を確保して、これまでと同じような蔵の環境を再建したのにかかわらず、「蔵付き菌」が働いてくれないのである。その後、懸命の工夫の末、伝統の「伊佐美」が再建できたのは転居から 3 ケ月後であったという。

「伊佐美」が演じた火付け役、1980 年代の第一次焼酎ブームでは、鹿児島に出張に来て覚えた焼酎「伊佐美」の味、九電社員などの要望に応え、また岩田屋の故中牟田会長に相談しながら定期的に岩田屋だけで伊佐美を販売するようになった。時世に動じない伝統の造りこそが、新しさである、との「伊佐美」造りの信念の継承が続いている。

（伊佐大泉～大山酒造合名会社）

大山酒造は、伊佐市のなかでも、旧大口市の中心居住区において 1894 年（明治 27 年）に創業され、今日まで 100 年以上の歩みを刻んでいる。「伊佐大泉」の銘柄で、伝統的な焼酎造りを継承している。焼酎造りの出稼ぎ技能者を「焼酎杜氏」と呼び習わしてきたが、この蔵では「阿多杜氏」が醸造の責任者であったが、現在は地元の「杜氏」山下昭悟氏が継承し、「伊佐大泉」の造りの伝統を引き継いでいる。

この焼酎蔵での極めて特徴的な点は、手麹づくりと白麹菌の使用を伝統的な造りとして採用していることである。

上に掲載した写真は、端麹菌を蒸し米に擦り付ける作業であり。現在、ほとんどの焼酎蔵で「自動製麹機」が導入され、手作業での風景

日本焼酎学会の主な活動の沿革

年代	主な活動
2005年	焼酎シンポジウム テーマ：本物の焼酎を求めて「本格焼酎と地域文化」 パネラー ①甲斐　由美氏 （九州沖縄農業研究センターさつまいも育種研究室主任研究官） ②佐藤　哲郎氏 （鹿児島小正醸造㈱　研究開発部長） ③有山　長佑氏 （長太郎窯元　代表者～初代黒じょか生みの親）
2011年	焼酎蔵巡り～芋焼酎 ・西酒造㈱（富の宝山）、森伊蔵、本坊酒造（桜島、貴匠蔵）
2012年	焼酎蔵巡り～芋焼酎 ・長島研醸有限会社（島美人）　小牧酒造㈱（小牧、一刻者）
2013年	焼酎蔵巡り～芋焼酎 ・三岳酒造㈱（三岳、愛子） ・本坊酒造　屋久島伝承館（太古屋久の島、石の蔵）
2014年	焼酎蔵巡り～球磨盆地の米焼酎 ・繊月酒造㈱（繊月、川辺）　木下醸造所（文蔵） ・松本酒造場（萬緑）　宮原酒造場（宮の誉） ・高田酒造場（山ほたる等多種）、松の泉酒造（松の泉、古蔵）
2015年	焼酎蔵巡り～麦焼酎 ・久保繊月㈱（久保、酔っちょくれ）、三和酒類㈱（いいちこ、西の星） ・天領日田クンチョウ酒造㈱（豊の国、せいら）
2016年	焼酎巡り～芋焼酎 ・佐藤酒造（有）（佐藤）、（有）中村酒造場（玉露、なかむら）
2017年	焼酎巡り～芋焼酎 ・大口酒造㈱（伊佐錦）、合資会社　甲斐商店（伊佐美） ・大山酒造合名会社（伊佐大泉）

（　　）は代表銘柄

は消えてしまっているだけに、極めて貴重な伝承である。この手もみの伝統的作業が今後とも継承されること、心より願いたい。

さて、酒類には、清酒・焼酎・ビールなどの種類があり、その定義とともに酒税についての詳細は「酒税法」で定められている。そのうちで、清酒と焼酎では醸造と蒸溜とに相違するが、さらに相違するのが麹菌の種類である。清酒は黄麹菌であり、焼酎造りが輸入された頃には黄麹菌を使用していたが、明治の末には泡盛に使用する「泡盛菌」が導入され、さらにその菌を分離して、焼酎造りでの多くが白麹菌あるいは黒麹菌を使用している。

この「伊佐大泉」では白麹菌だけで造られ、さらに「タイ米」が使われている。杜氏の話によれば、タイ米の「インディカ」が手もみの麹菌掛けに良く合う、というのである。

（伊佐焼酎は、内陸型の焼酎）

鹿児島県は「薩摩焼酎」のブランドで、戦後焼酎ブームを牽引してきた。「焼酎」は、蒸溜酒であり、清酒の醸造酒とは基本的に区別される。その蒸溜酒は、その産地が九州・沖縄地域に限定されてきたのは、興味深いことである。こうしたほとんどの焼酎蔵の立地が海洋岸の近くにあるのは、搬入の利便性とともに、蒸溜技術が海洋を介した「輸入型」であることを示しているように思える。さて、上述した「伊佐焼酎」は内陸型なのである。「伊佐焼酎」と峠を隔てて背中合わせに立地する、古い伝統を誇る「球磨焼酎」も「内陸型」なのである。しかも、本稿の最初に紹介した「郡山八幡宮」はかって相良藩に属し、薩摩藩ではなかったのである。今日、この著名で伝統豊かな二つの焼酎産地の関係は、ほとんど研究されていないのである。

●今後の活動に期待

一昨年、球磨盆地を訪れ、米焼酎の蔵巡りを行った。球磨盆地には 28 蔵があることに、ほんとに驚愕した。相良藩は朝鮮の方から製法が伝わったと言われており、調べていると薩摩焼酎より古いのではないかという気もする。

今回の蔵巡りで、豊田先生が指摘された相良藩の米焼酎と薩摩藩の芋焼酎の関係性は、非常に興味のあるテーマである。

今後、日本焼酎学会としては、第 2 回目のシンポジウム開催の話も持ち上がっている。私は、蔵巡りをはじめ日本焼酎学会の今後の活動を盛り上げていければと思っている。

会員さんとの焼酎を囲んでの四方山話も楽しく、福岡から 1 時間半かけて田川まで出向いているのである。　　（やまだ　たつお）

近　　況

熱 10 数年ぶりに大相撲を見に行く

私が加盟している異業種交流会・SAS 九州のメンバーから九州場所のチケットが手に入るので、一緒に行きませんかとのお誘いを受けた。

私も朝青龍一人横綱時代の観戦以来であり、久しぶりに大相撲に行ってみたくなり、直ぐに申し込んだ。

すると後で 1 人欠員が出た為、私の大学時代の後輩のＮ君を誘った。4 人揃ったところで 11 月 23 日の夕方 15 時半ごろからの観戦となった。

●溜会の副会長からのお接待を受ける

枡席に座ると、十両の最後から 2 番目の取組

みが始まっていた。中入前の休憩に入ると、N君が「溜会（相撲ファンの会員制の会、相撲道の奨励、振興を図るとともに相撲道を通じて社会道義の昂揚と社会福祉に寄与することを目的として設立された会であり、東京、名古屋、大阪、福岡にそれぞれある団体）に知っている人がいるから、1階に挨拶に行きましょう。」と誘ってくれた。

私は溜会という存在も知らないまま、N君に付いていくと、控室でお茶とお菓子等のおもてなしを受けることとなった。その後、中入後の観戦中に副会長自らお菓子やミカンを差し入れていただいた。N君の思わぬ相撲ネットワークのおかげで、相撲観戦以外の違った雰囲気を楽しませてもらった。

●相撲の様式美を感じる

本場所での大相撲を観戦し、改めて相撲は様式美であると感じた。中入り前の関取衆が円陣を組んでの儀式にはじまり、横綱の土俵入り、仕切りの儀式、取組み終了後の弓取りなど、すべてが様式化しており、美しい。

特に白鵬の土俵入りは、テレビで見るより、美しく、迫力があった。

また、改めて感じたのは、ご贔屓の相撲取りが登場すると「頑張れ」の声援があるのは当たり前であるが、ご贔屓の相撲取りが負けても、けなす等のヤジが飛ばないことである。プロ野球観戦となると、時たま、品の良くないヤジが見受けられるが、お客の方も格式を重んじるのか、礼儀正しい気がする。

●仕切り時間が短い

相撲をテレビで見ていると、制限時間までの仕切り時間が非常に長く感じることがあり、間が持たないことがある。

しかし、生でみると、隣の人とのおしゃべりや他のお客さんの声援、飲食などで仕切り時間が「あっ」という間に過ぎてしまう。

ちょっと油断していると、取組み自体を見損ねてしまう。

大相撲に行ったことのある人なら、この現象を誰もが体験すると思う。テレビだと視線はた

九州場所12日目の大入袋。10円玉が入ってました

だ一点に絞られるが、生だと五感すべてに色々な情報が飛び込んでくるためであろうか？不思議である。この日は九州出身力士の琴奨菊や松鳳山などが負けてしまい、九州場所としては残念な日であったが、十分、相撲の醍醐味を味わうことができた。

大相撲終了後は、メンバーのMさんの行き付けの小料理屋に連れていかれ、美味しい肴とお酒で仕上げとなった。

相撲会場での酔いも重なり、かなりの酔い（良い）加減で家路についた次第である。

（山田　龍雄）

社会支出の方向

地方創生はまだ真剣な取り組みが行われていないと、昨年行った勉強会の時に、中央大学の山﨑朗教授が指摘されました。人口が減り、高齢化し、土地が余り、住宅が余り、あらゆるものが過剰になる状態、マイナスを抑えながら、豊かな生活を維持していくということ、撤退の状態で戦いながら逃げていく、これは初めて経験することであり、六次産業化や特産品開発等、プラス志向だけでなく、シビアな撤退の方策を考えなければいけないと言われました。

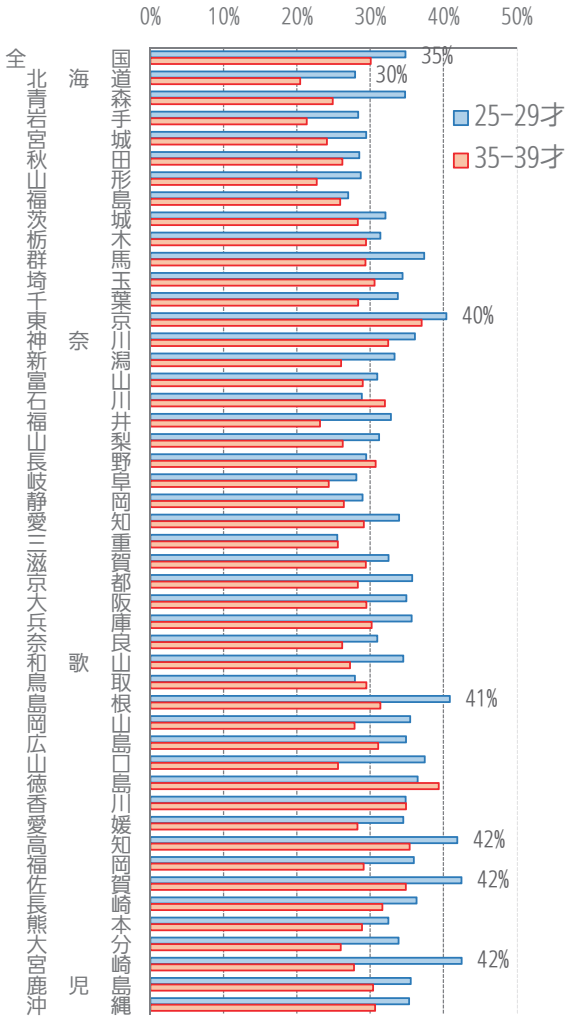
昨年末に知人から聞いたことですが、女性医師数が近年増加しているそうですが、医師の仕事を辞める人が増えているという問題が起きているそうです。

厚生労働省による「平成26年医師・歯科医師・薬剤師調査」によると、全国の届出医師は

311,205 人、人口 10 万対では 244.9 人となっています。これは 30 年前の 1984 年の人口 10 万対の 150.6 人に比べて、約 95 人増加しています。この増加には女性医師の増加が貢献しています。どういうことかというと、医師の国家試験受験者数は、この 30 年間はほぼ 9 千人前後で、合格率はだいたい 90%前後ですが、女性の合格率が男性よりも 3 ポイント程度高い状態が続いています。そして受験者数、つまり大学医学部入学者数も女性の比率が徐々に高まっています。国立大学医学部（群）では、男女は同数程度にまで近づいています。

平成 26 年時の都道府県別・年齢 25 ～ 29 才と 35 ～ 39 才の両世代医師の女性比率を見ると、全国平均は 35%から 30%に下がっています。25 ～ 29 才の 1 位は高知県、佐賀県、宮崎県 42%、次いで島根県、東京都と続き、30%を超えている県がたくさんあります。しかし、35 ～ 39 才の女性比率は、ほとんどの県で低くなります。医師の世界においては、多くの女性が活躍していますが、この年代になると、出産や子育てのために仕事を辞めていく人が多いようです。いったんは離職するのは仕方ないとしても、復活して仕事を続けられる、復帰しやすい環境がなければ、今後女性の医師数は減っていくことになります。厚生労働省による平成 28 年の医師の需給推計では、子育て等による女性医師の仕事量を男性医師に対して 0.8、医師の女性比率 32%と想定しています。しかし、女性比率は確実に上がっていることから、全体の仕事量をこなすためには、女性医師の仕事量 0.8 を確実にするための支援環境がさらに必要になります。

25-29 才、35-35 才医師の女性比率



資料：「平成26年医師・歯科医師・薬剤師調査」厚生労働省

2016 年 1 月号で、GDP に占める「家族や子ども向けの社会支出」の比率が高い国とそうでない国の出生率が違うことを書きました。女性の働く機会が増えるだけでなく、長く働き続けられる環境づくりをしなければ、地域によっては現在の医療サービスを維持することも難しくなるため、社会支出の方向を大きく変えざるを得ないことになるかもしれません。今年は、さらに気を引き締めて仕事に取り組んでいかなければと思っています。（山辺　眞一）

今年も九州各地の観光・物産振興に関わっていきたいと思います

昨年は観光関連のマーケティング調査業務を増やそうと年始に決め、積極的に営業活動を展開した一年でした。年明けに随時報告書を提出していくことになるので、年度末まで慌ただしい日々が続きそうです。

人々のライフスタイルが急速に変化するなかで、その嗜好を把握するための調査ツールも日々進歩し、ターゲット地域は案件ごとに変わりますので、追いついていくのは簡単ではありません。ただ、調査を通じて知り得た情報をもとに、施策を考える際の大まかな施策分野や、マーケティング戦略を策定するうえで漏らしてはいけない検討項目は、そう急激に変わるもの

ではありません。今年も、新しい調査ツールを活用し、新たなターゲット地域からの誘客に取り組むための戦略づくりをお手伝いできればと思います。

九州の観光・物産振興に関わる身として、自分自身が各地の魅力を知っておかなければということで、年間を通じて暇を見つけては家族を連れてあちこちと現地調査をしてきました。

7月にはLCCのピーチで沖縄に飛び、那覇の泊港から高速船で座間味島に渡り、民宿前のビーチでウミガメと一緒に遊泳。LCCは福岡～沖縄が一人片道7,000円。南西諸島ならではのエメラルドグリーンの海をお手軽価格で楽しむことができました。

また、8月には、家族で延岡市の「藤河内渓谷」と、奇跡の清流と呼ばれる「小川（こがわ）」、そして「高千穂」を巡る2泊3日のキャンプツアーに出かけました。

11月には小学3年生の長女と二人、久住高原の坊がつるでキャンプし、翌朝暗闇のなか大船山を登り、山頂（1786m）から美しいご来光を拝みました。

今年も、仕事でも、いち観光客としても、九州の観光・物産の振興（買い物や宿泊という面では微力ですが…）のためお役に立てればと思います。（原　啓介）

新年の抱負

あけまして、おめでとうございます。本年も、どうぞよろしくお願いします。

毎年のように大きな災害が起こっています。災害は必ず起きる。災害を防ぐことは難しいですが、被害を減らすことは出来る。減災のために何が出来るかを、1人1人考え、行動に移していくことが重要だと思い知らされています。備蓄や避難所、避難場所の準備など、出来ることからはじめませんか。

さて、毎年、目標を幾つか掲げるのですが、ここ数年、どうしても達成できない目標が、そう「減量」です。言い続け、かれこれ何年でしょうか。90キロまでは減るんです。あと1キロが遠い。減量は、意識はしつつも成るようになるということにします。

では、今年の目標をどうするか。ここ数年、意識しているのは「当たり前のレベルを上げる」。世の中には、色々と「当たり前」と言われることがあります。時間を守る、期限を守る、字（数字）を間違えない、質を高めるなどなど。ところが、この当たり前のことを、当たり前のようにするというのが、結構、難しい。ミスを防ぐ、より良いものを創るためには、やはり日々の努力は欠かせないということでしょう。単純な作業をしっかりと出来ない限りは、より複雑で、高度なことは出来ないということを忘れずに、コツコツとやっていきたいと思います。

（山﨑　裕行）

博多古民家で飲む日本酒の会

ここ数年の正月号の自分の記事を読み返してみて、毎回お酒の話だったことに愕然としたのですが、今年もめげすにお酒の話からスタートさせていただきます。

前号で紹介した博多町家の再生を行っている小林さんの事務所の2階がステキな場所で、厨房もあったことから、ぜひ飲食系のイベントでも使わせてもらいたいと思っていました。また、過去何度も日本酒の会に協力していただいている平川さんの単独の会を開催していなかったことから、博多町家で実施しました。

11月はイベントが多い時期で、いままで常連のように参加していた方々からは、落語会などで参加できない旨の連絡を、参加者よりも多くいただきました。開催日も慎重に決めないといけないなと反省しながらも、ありがたいことに最終的には定員（12人）いっぱいの参加がありました。

お酒のチョイスは筑後川沿いの蔵を中心に6本。半年以上熟成させた“ひやおろし”などの秋酒が中心です。酵母をコスモスから抽出したお酒や1年半寝かせた古酒に近いお酒もありました。毎回恒例の人気投票（もう一度飲みたい酒）では、繁桝の壱火（限定純米大吟醸）が過半数の人から支持されていました。参加者は相当な左党ばかりで、濃厚な酒に人気が集中していたのが印象的でした。

やはり、事務所の会議室と町家の雰囲気は違

いつにも増して明るい会（特に前列）でした

います。木に囲まれて、落ち着いていて和みます。参加者の中には「単なる日本酒の会ではなく、古民家というシチュエーションに惹かれた」という人もいました。ただ、準備時間が足りず、テーブルのセッティングがほとんどできませんでした。ラフというかズボラというか、酒飲み仲間だから許してもらえたところがあります。

会自体の評判はとてもよかったので、また古民家で企画をしたいのですが、次回はもうちょっと、おしゃれにできるよう準備もがんばろうと思います。もし、手伝ってくれる方がいらっしゃれば大歓迎です。　　（本田　正明）

私事ながら…

私事ではありますが、昨年の7月に入籍、10月に結婚式を行いました。新たな門出を迎え、守るべき家族もでき、一層頑張らねば、と思っているところです。

さて、そんな中で11月に1週間のお休みを頂き新婚旅行に行ってきました。

中々まとまった休みが取れることも少ないだろうということで、せっかくならと選んだ行き先はローマとまさかのバルセロナ。

折しも時期はカタルーニャ州の独立で連日メディアに見出しが躍っていた真っ最中。行き先を決めてから、独立のための投票が行われ、ついには独立宣言。果たして無事に行くことができるのか、はたまた無事に帰ってくることができるのかと妻と二人で心配していました。

●…39.0℃？

日本を出発する前夜、一抹の不安はありつつも、最終の準備をしていたところで、若干の頭痛と寒気。風邪の気配を感じたため、風邪薬を飲み、布団を着込んで就寝しました。

出発当日。起きると、とてつもない倦怠感。もしやと思い熱を測ると、まさかの39.0℃。慌てて病院に駆け込んで、検査。インフルエンザだったら…と思っていたのですが、結果は陰性。とりあえず、薬を飲み様子を見ることとしました。家を出るタイムリミットが近づいてきて、熱を測ると37.4℃。それならばと、空港へ。飛行機に乗るころまでには36.8℃まで下がっていました。結婚式やらの疲労もあったのでしょうが、我ながら「遠足前の子どもじゃないのだから」と情けないやら何やら。出だしから暗雲立ち込める旅の始まりでした。

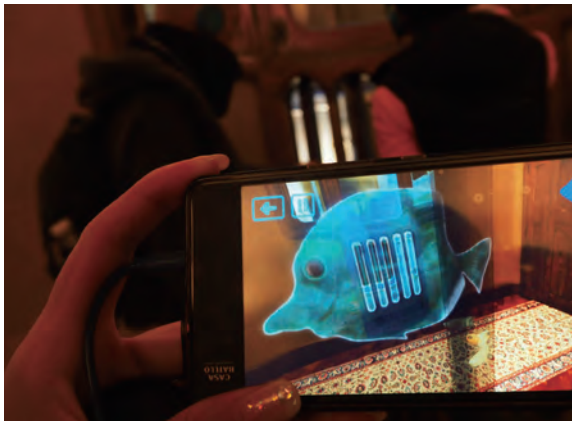
●果たして行けるのか、バルセロナ

今回の旅の行程は、先にローマに3日、それからバルセロナに3日でした。飛行機関連は特にトラブルもなく無事にローマに到着。飛行機で20時間近く寝ていたおかげで、体調もほぼ回復していました。

ローマでは、バチカンの観光地を巡ったり、買い物をしたりと楽しむことができたのですが、唯一、食事だけは心残りが。特に①量が多い（日本の1.5～2倍）上に主菜は1人1品の注文がマナー、②パスタは非常に塩辛い（日本より塩を多めに使うようで、注文の際に塩を少なめに頼むのが日本人に合っているというのを帰ってきてから知りました）というところで、何とも残念な結果と相成りました。

そんなこんなであっという間にローマ滞在も終了し、いよいよバルセロナに向けて出発。空港に到着し、何事もなく飛行機へ。飛行機も定刻より早くバルセロナ空港へ。空港でもユーロ間の移動だったため、入国手続きもなく、あれよあれよ、あっさりバルセロナの地に降り立ったのでした。若干拍子抜けしつつも車で市街へ移動。同乗したスペインをぐるっと回ってきたご夫婦の話だと、カタルーニャ以外の都市では特に独立の影響はなかったとの事。

ホテルに到着し、そこから市内を観光したのですが、意外なほどに何も起きず。日本で報道されていたようなデモも見当たりませんでした。



カサ・バトリョにて。音声案内とともに、住宅として使用していた当時の様子やガウディの設計思想をARで見ながら、回ることができる

バルセロナ市庁舎。独立を訴える垂幕がかかっている。「政治的捕虜からの自由を」という意味の様

実際にバルセロナに住む日本語アシスタント（観光地への移動のサポートをしてくれる方、スペインでは試験に合格して公認の資格がないとガイドができない）に話を聞くことができたのですが、一部で報道にあるようなデモも起きているが、日常に大きな影響が出るほどではない。よほど変な場所に行かなければバルセロナ市内で、独立の影響で危ない場所もないとのことでした。

結局、滞在期間中に大きなトラブルもなく、食事の味付けに悩むこともなく、高校生の頃に建築を志す１つのきっかけとなったガウディの作品群を見ることができ、大満足の旅となりました。

●独立と日常

結果的には我々の旅行には大きな影響がなかったカタルーニャ州の独立運動でしたが、その事に触れる機会が全くなかった訳ではありませんでした。

バルセロナ市庁舎には、独立運動を訴える垂幕がかかっていたり、ベランダにサニェーラ（カタルーニャの旗）を掲げている民家も滞在中、至る所で見かけました。

また、FCバルセロナの試合をカンプノウに見に行ったのですが、応援のチャントと一緒に“LLIBERETAT”がスタジアム中から聞こえてくるなど、当然ではありますが、現地の人たちにとっては、この独立というのは大きな問題であるようでした。

結果として我々はデモや事件に直面することはなく、街は普段の日常を過ごしているようでしたが、どこか静かに、しかしはっきりと「カタルーニャの独立」というものを肌にヒリヒリと感じる、そんな空気感でした。

無事に帰国をしたからこそ、こう思えるのかもしれませんが、なかなか日本にいて日常では感じることのない、民族や独立といった事を感じることができた、そういった意味ではこの時期に行けたことは良かったように思います。

（櫻井　恵介）

航空オタ５年目に突入

2017年も熊本、松島、入間、新田原にブルーインパルス（以下ブルー）を見に行ってきました。

●熊本の復興祈念飛行

友人から「4月に熊本でブルー飛ぶらしいよ」と教えてもらったのが３月。正式発表前で、しかも熊本県民どころか九州人でもないのに、どこで仕入れてきたのだろうと情報網に感心しつつ、もちろん行くでしょ！って事で、熊本復興飛翔祭というイベントに行ってきました。

飛行ルートは、福岡県の築城基地を離陸し、熊本城の上空で展示飛行を行い、帰りに被災した益城町、西原村、南阿蘇村の上空をスモークを出しながら飛行するというものでした。

前日の事前訓練は、熊本城のメイン会場ではなく、弊社でお仕事をさせていただいている縁もあったので南阿蘇で見ることにしました。事

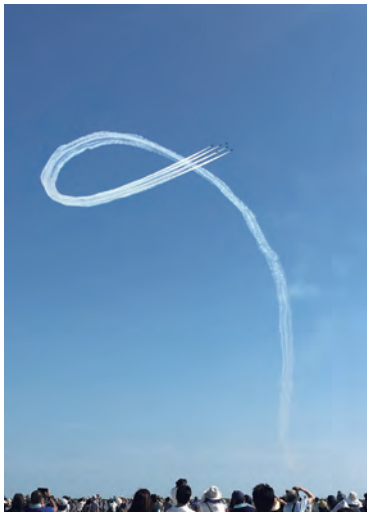
山の上にうっすらと線状のスモークが見えるのがブルーです。ちなみに南阿蘇村役場は写真右下あたりの位置にあります

熊本城二の丸広場から。手前には地震で崩れた瓦礫が残っています

前に公表されていた飛行ルートでは、西から飛んで来たブルーが南阿蘇村役場付近の上空で北へ進路を変えるものだったので、旋回するところが写真に撮れるのを期待し、南阿蘇村役場の西に位置する俵山峠展望所にて待ち構えることにしました。

結果は撃沈。ブルーの旋回ポイントが南阿蘇村役場よりもはるか東のほうだったので、小さくてほとんど見えず、かろうじてスモークでブルーだとわかる程度で「雄大な阿蘇の大自然とブルー」という私の目論見は崩れたのでした。その後は反省会という名の飲み会。「南阿蘇村役場の上で旋回するんじゃなかったのー、あそこは高森だよー」と愚痴り本番に向けてスッキリしました。

イベント当日は見事な快晴。メイン会場の熊本城二の丸広場には、熊本出身の友人が「花見の時でもこんなに混まない」と言うぐらい沢山の人が来ていました。多くの人がブルーを見て元気を貰えていたらいいなと思いました。



復興の象徴である課目フェニックスロール

●祝・松島基地航空祭復活！！

8月東日本大震災以降7年ぶりに松島基地航空祭が開催されました。前年は復興感謝イベントという人数制限があるイベントでしたが、入場制限のない従来の航空祭としては今回が完全な復活となりました。

この日も晴天。4万3千人の来場があったそうです。松島基地航空祭ではブルーは午前と午後2回飛びます。ブルーの本拠地ならではです。最後はフェニックスロールという前年の復興感謝イベントで初披露するために新しく開発された復興の象徴である課目が披露されました。

2018年は、まだ行ったことのない基地に足を運ぼうと思います。本年もよろしくお願いいたします。　（佐伯　明日香）

よかネット　No. 129　2018.1
（編集・発行）
㈱よかネット
〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階
TEL 092-283-2121　FAX 092-283-2128
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6205-3600
東京事務所　TEL 03-3288-0240
名古屋事務所　TEL 052-202-1411
㈱地域計画・名古屋